

仏教徒ベトナム人技能実習生の心の拠り所：地域日本語教室でのPAC分析の調査をもとに

清藤，隆春
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/4495879>

出版情報：地球社会統合科学. 28 (1), pp.1-14, 2021-09-15. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：(c) 2021 Ryushun KIYOFUJI

仏教徒ベトナム人技能実習生の心の拠り所 —地域日本語教室でのPAC分析の調査をもとに—

Peace of Mind for Buddhist Vietnamese Technical Intern Trainees:
Based on PAC (Personal Attitude Construct) Analysis in the Local Japanese Language School

キヨ フジ リュウ シュン
清 藤 隆 春

KIYOFUJI Ryushun

キーワード: 多文化共生 仏教徒ベトナム人技能実習生 心の拠り所 地域日本語教室 PAC分析

1. 研究の背景と目的

日本において、外国人労働者数は年々著しく増加しており、厚生労働省(2020)によると2019年10月末には165万8,804人で前年末に比べて13.6%増えている。前年伸び率1位はベトナム人(26.7%増加)であり、総数トップの中国に迫りつつある。在留資格別では、前年伸び率1位は技能実習生(24.5%増加)で、総数トップはベトナム人となっている。

この技能実習制度の目的は、開発後上国の経済発展を担う人材育成への貢献となっているが、現状としては、主に労働力の不足する過疎地域に派遣され、人材不足に直面する労働現場の労働力となっている。そして、低賃金、過酷な労働環境により実習生の失踪等が社会問題になっている(上林 2015; 駒井 2006)。2017年に技能実習法が施行されて罰則が強化されたが、2018年には約7割に労働基準関連法違反があるなど、改善は十分ではない上に、転職の自由が認められることはなく、地域移動は制限され、人権尊重の理念に欠けている(宮島他 2019; 永吉 2020)。

2018年に入国管理法が改正されたことを皮切りに、政府の外国人受入れの方針としては、2020年に「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」(法務省 2020)が策定され、そこに「言語、宗教、習慣等の違いに起因する問題への対応が重要課題だ」との文言があるが、これは日本に住む外国人の定住を実質的に容認するものであり、日本にとって極めて大きな歴史的な方針転換である(毛受 2020)。外国人労働者を単なる労働力と見る考えを捨てて、多文化共生¹社会を構築していく一員であるという姿勢を持つことを私たちは求められている。し

かし、先述のように、近年急増する技能実習生の労働環境を見ると、現状としては彼らが安心して生活を送れる環境であるとは言えない。技能実習生たちが辛さや孤独から解放されて安心できるような支え、いわゆる心の拠り所²を持ちながら日本で働ける環境を整えることは、国として喫緊の課題である。

技能実習生を含め地域で生活する外国人を地域でサポートする場として、地域日本語教室³があげられるが、この地域日本語教室を心の拠り所²にしている外国人もいる(山辺 2011)。地域日本語教室には、外国人が日本語を学ぶ場所としての役割があり、日本に住む上で必要不可欠な情報等を日本人から直接知ることのできるライフラインともいえる役割を果たしている(毛受2020)。技能実習生の来日目的が多様化してきているが、技能実習生たちの日本語学習に対して積極的な企業も増えていることも相まって、地域日本語教室で日本語学習に励みたいと考える実習生が増えてきている(宋 2017)。母国での人間関係を失い、地域の情報を得られずに不安を抱えた外国人が温かく受け入れられて、地域の情報を得ながら日本語学習ができる教室は、外国人の心の支えになり得る環境であり、ますます重要な存在となっていると言える(山辺 2011)。

日本で生活する外国人の中には、宗教的な面で不自由に感じている人も少なくない(三木 2017)。ベトナム人について言えば、約80%が仏教徒であるが、日本国内で信仰を続けるのは極めて難しい現状にある(野上 2010)。カトリック教徒は世界統一基準があるため比較的容易に異国でも信仰活動を確保できるが、仏教徒のベトナム人は信仰が極めて困難である(野上 2010; 川上 2001)。近年日本に複数のベトナム寺院⁴が建立されて

いるが、一部の大都市圏に限られていることも、多くのベトナム人仏教徒の信仰の難しさの理由の一つとされる(三木 2017)。都市部から離れた地域で暮らす仏教徒ベトナム人は、心の拠り所を仏教に求めることは実質不可能ではないだろうか。宗教面での支援も今後の日本社会の課題と考えられるが、近年増えているベトナム人技能実習生の信仰についての実態把握は必要不可欠である。

技能実習生を含め外国人との多文化共生の実現に向けて、まずはこの近年急増するベトナム人技能実習生の心の拠り所はどこにあるのか、また宗教の信仰は十分であるのか、その点について実態把握は急務である。本稿では、地方都市で散集して暮らしていく仏教徒のベトナム人技能実習生に焦点を当てて、宗教面を含めて、その心の拠り所はどうなっているのかを明らかにしていく。これは、多文化共生社会における地域日本語教室、および宗教の役割を明らかにしていくことに、大いに貢献しうると考えられる。

2. 先行研究概観、および先行研究の問題点

2.1 技能実習生の生活実態や心の拠り所の先行研究

ベトナム人技能実習生の生活実態については、グエン(2013)が、技能実習生へのインタビューと実習生の管理団体や受入れ企業でのフィールドワークをもとにした研究を行っている。高額な保証金など、送り出し機関側の問題を明らかにしつつ、実習生たちの抱える問題についても分析している。特に職場での不満やストレスが重なり、精神的な病気が生じていること等、劣悪な職場環境の実態を指摘している。

また、中川ほか(2018)は、ベトナム人技能実習生だけでなく受入れ団体にもインタビュー調査を行い、実習生の日本語の学習環境と学習意欲について調査している。ベトナムにおける日本語教育熱の高さを背景に、ベトナム人技能実習生の高いキャリアアップ思考と日本語学習に対する高い学習動機を明らかにした。

地域日本語教室での調査としては、佐藤ほか(2018)の研究がある。外国人労働者の配偶者やその子供、技能実習生の通っている複数の日本語教室を調査地として、参与観察や日本語教室の支援者へのインタビューをもとに、ボランティアと学習者双方にとって日本語教室が心の拠り所となっていることを明らかにしている。

2.2 先行研究の問題点

このようにベトナム人技能実習生を対象とした生活実態や地域交流についての調査は散見されるが、心の拠り所という視点での研究は管見の限りない。地域日本語教

室で日本語を学ぶ外国人の心の拠り所についての調査も見られるものの、支援者の視点から明らかにした分析となっている。急増するベトナム人技能実習生との共生へ向けて、彼らが何に困り何を心の拠り所としているのかについて、彼らの視点をもとに分析し、明らかにする必要がある。

在日ベトナム人の仏教の信仰については、都市部に集住して暮らすベトナム難民⁵に焦点を当てて行った研究しか見当たらない。地域に散住して暮らす仏教徒のベトナム人技能実習生の信仰について、その実態を当事者の視点から明らかにすることは、彼らの日本への定着に向けて喫緊の課題と言える。

3. 調査方法

3.1 徳島県吉野川市の地域日本語教室での予備調査

徳島県にある吉野川市国際交流協会主催の地域日本語教室⁶を、本研究の調査地の候補にした。徳島県を候補にあげた理由としては、県内の外国人労働者数の前年伸び率が12.7%増であり、外国人労働者が増加している地域の一つと考えられ、さらに県内の外国人労働者はベトナム人技能実習生が最多となっているからである。また、県内における技能実習生の割合では吉野川市が最多である(徳島労働局 2020)ため、吉野川市の地域日本語教室を本研究の調査地の候補とした。

この吉野川市の地域日本語教室が相応しいか確認するために、4回の予備調査を実施した。第1回の予備調査では、2020年6月に吉野川市国際交流協会の会長および日本語教室の講師と面談をして、吉野川市の地域日本語教室の実態について聞き取り調査を行った。日本語教室に通う受講生のほぼ全員が技能実習生であり、ベトナム人が最多⁷であることがこの調査で明らかになった。第2回の予備調査(2020年6月実施)では、日本語教室の学習者や支援者の活動の様子を把握するために、実際に山川教室(吉野川アメニティセンターにて開催)へ行って授業見学を行った。

ついで、第3回と第4回では、ベトナム人技能実習生の日本での生活実態、宗教の有無、また日本滞在時の信仰実態を確かめた。第3回の予備調査(2020年7月実施)では、鴨島教室(吉野川市文化研修センターにて開催)でベトナム人技能実習生4名に対して半構造化インタビュー⁸を約20分ずつ実施した。第4回の予備調査(2020年8月実施)では、山川教室で他のベトナム人技能実習生4名に約30分ずつ半構造化インタビューを行った。調査に協力してくれたベトナム人技能実習生8名全員がベトナム北部ハノイ市近郊の地方出身者であつ

たが、中国文化の影響が強い地域出身からか、8名全員が仏教徒であった。吉野川市の地域日本語教室に通っているベトナム人技能実習生は、仏教徒の割合が高いと考えられる。そのため、吉野川市の地域日本語教室は、散集する仏教徒ベトナム人技能実習生の心の拠り所を調査する場所として相応しいと判断した。

3.2. 調査に用いた手法

本調査で用いる研究手法は、PAC分析実施法（以下ではPAC分析と略記する）で、PACとは、Personal Attitude Construct（個人別態度構造）の略である。当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスターの解釈やイメージ、調査者による総合的な解釈を通して、個人ごとにイメージや態度の構造を分析する方法である。調査者のスキーマに不適合な調査協力者の独自性を排除せず、逆に積極的に取り上げて個人独自の態度構造を捉える観点を重視しているといえる（内藤2017）。統計手法とカウンセリング手法の両方が含まれた質的分析、言い換えると、量的研究が併用された研究方法であり、心理学を越えて幅広い分野で適用されている（内藤他2008；2011）。本調査では、仏教徒のベトナム人技能実習生が何を心の拠り所とし、何に困っているのかについて、調査協力者の独自の内面を心理学的に捉えるために、このPAC分析を用いることにした。

基本的な手順は、内藤（2017）を参考にしている。まず初めに、調査対象者に対して、連想刺激として、連想刺激文が印刷された文章を呈示するとともに、口頭で読み上げて教示する。ついで、おおよそ縦3cm、横9cmの大きさのカードを40枚程度調査協力者の前におき、頭に浮かばなくなるまで自由連想させて、カードに記入してもらう。

この後、「今度は、言葉の意味やイメージがプラスであるかマイナスであるかの方向には関係なく、あなたにとって重要と感じられる順にカードを並べ換えて下さい」と教示し、想起順位と重要順位の一覧表を作成した。次に、全てのカードの対を選びながら、「あなたがあげてくれたイメージや言葉を書き記したカードの組み合わせを見て、その言葉の意味ではなく、直感的なイメージで、どの程度似ているかを判断して、その近さの程度を以下の尺度の該当する数字で答えて下さい。非常に近いは1、かなり近いは2、いくぶんか近いは3、どちらともいえないは4、いくぶんか遠いは5、かなり遠いは6、非常に遠いは7です」と口頭で教示し、上記7段階の評定尺度に基づいて、類似度を評定してもらい、各項目間の類似度距離行列を作成した。

その後、統計ソフトのHALBAU⁹を用いて、類似度距離行列をウォード法でクラスター分析し、デンドログラムを作成した。ついで、析出されたデンドログラムをプリントアウトして、デンドログラムの余白部分に連想項目の内容を記入し、調査対象者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに項目を読み上げながら、一緒にクラスター分けを行った。

その後、まとめられた各群の意味する内容の解釈について質問を繰り返して全ての群が終了した後、第1群と第2群、第1群と第3群、第2群と第3群というように、クラスター間を比較してもらって、イメージや解釈の同異について質問した。続いて、解釈しにくい項目を取りあげて、補足的に質問した。最後に、各連想項目のイメージがプラス(+)、マイナス(-)、どちらとも言えない(0)のいずれかであるかについて答えてもらった。

3.3. 調査対象者

調査対象は、徳島県の吉野川市国際交流協会主催の日本語教室（鴨島教室）に通っていたベトナム人元技能実習生2名である（表1参照）。なお、予備調査で聞き取りをしたベトナム人技能実習生もこの中に含まれている。この2名を選んだ理由としては、共に技能実習期間を終えており客観的に振り返ることができると考えられ、また共に日本語能力試験2級を取得して1級取得を目標と掲げる等日本語能力が高く、複雑な心理を面談の中で問題なく言語化できると考えたからである。ただし、会話中に日本語文法等で誤りが生じた際には、本稿に抜粋する際は筆者の方で修正して記載した。

また、PAC分析の発言内容を補完することを目的として、2人には事前に半構造化インタビューを数回、合わせて約2時間実施した。質問項目は、①日常生活の不安なことや辛いこと（質問例「日本で生活する上で、何が一番辛いですか」）、②心の支えになっていること（質問例「日本で生活していて、一番安心できるのはいつですか」）、③信仰する宗教とその信仰活動についての現状（質問例「信仰は十分に行えていますか」）である。

表1 調査対象者一覧

	技能実習期間	年齢	性別	出身地域	宗教	ベトナムでの信仰活動
A	2010年～2013年	30歳代	女	ハノイ近郊	仏教徒	毎月1-2回ほど寺院へ参拝
B	2018年～2021年	20歳代	男	ハノイ近郊	仏教徒	毎月1回ほど寺院へ参拝

3.4. データの収集方法

調査協力者AとBへ調査は、2021年4月および5月の2回に渡って行い、所要時間はそれぞれ約2時間であ

る。Aは日本語教室にて対面で実施し、Bは調査の直前にベトナムへ帰国したため、オンラインビデオ会議システムのZOOM¹⁰を用いて遠隔で実施した。

調査協力者には、倫理的な配慮も行い、事前に対面にて「調査依頼書」(ベトナム語)を読んでもらい、「研究倫理誓約書」(ベトナム語)への署名に同意を得られた場合に限り、このインタビュー調査を実施した。すべてのインタビューは、書面で同意を得た上で、ボイスレコーダーに録音した。

4. 分析結果

4.1. 調査協力者Aについて

4.1.1. 連想項目の一覧

調査協力者Aに対して、「日本で働いていた時、どんな時に辛かったり、孤独に感じたりしましたか。また、それを忘れられたり、安心できたことや人、場所等を教えてください。仏教に関することでも良いです。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して下さい」という連想刺激文を呈示したところ、14の言葉が連想された。Aは通訳もするなど日本語力は非常に高いが、日本語を十分に書けないため、カードへの記載については筆者が代わりに行った。それらの言葉の想起順位と重要順位の一覧が表2である。

表2 連想項目一覧

重要順	項目	想起順
1	家族と離れて寂しい	1
2	仕事に慣れて任されるようになった	11
3	ベトナム人の友達ができ	5
4	他の実習生から嫌われた	2
5	日本語教室に来る	4
6	近所の日本人がよく話しかけてくれた	3
7	近くのお寺で心を落ち着けていた	10
8	日本語の通訳を頼まれるようになった	9
9	近くのお寺に行った	6
10	ベトナム料理を日本語教室の先生に食べさせてもらった	13
11	日本の正月に近所の人に招待してもらって参加した	14
12	地元で何かあっても戻れず親不孝と思った	12
13	休みの日にベトナム人の友達と買い物に行った	8
14	日本語教室の先生に花見などに連れて行ってもらった	7

4.1.2. 分析の結果図(デンドログラム)

調査協力者Aが想起した14の言葉について、それぞれの項目同士の類似度をAに評定してもらい、類似度距離行列を作成した。それを統計ソフトのHALBAUでクラスター分析(ウォード法)した結果図(デンドログラム)が図1である。なお、図1の左の数字は重要順位であり、各項目の後ろの()内の符号は単独でのイメージ

である。まとまりを持つ項目ごとに丸で囲まれたものがクラスターで、クラスターは4つ作成され、上から「クラスター1」~「クラスター4」とした。

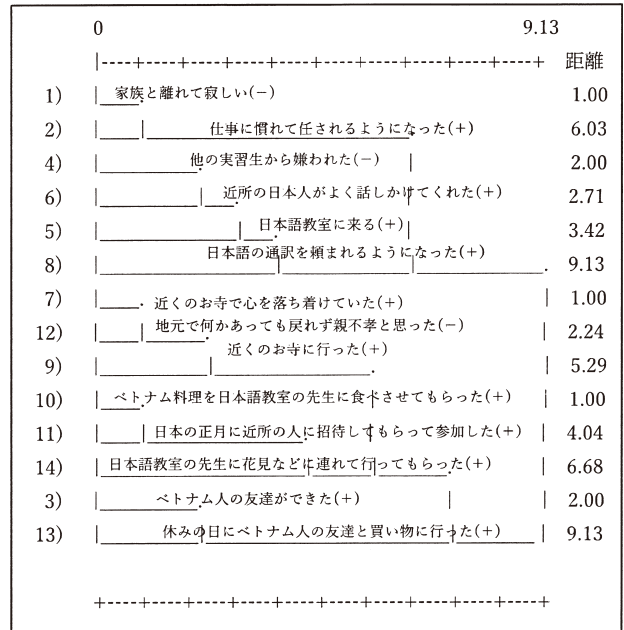


図1 調査対象者Aのデンドログラム

4.1.3. クラスターの解釈

調査協力者Aの解釈の要旨を示す。ここでは、原則として、Aの発話をそのまま引用し、「」で表す。連想項目は【】で表し、クラスター名は《》で表す。次いで、クラスター間の類似点と相違点、および補足質問を示した後、総合的な解釈を行う。

(1) 《家族と離れた寂しさ》

クラスター1は、【家族と離れて寂しい】の1項目のみである。

「ベトナム人にとって家族が一番大切なんです。遠いところに行っても正月とか家族のもとに帰りたいです。」

クラスター1を、「家族と離れた寂しさ」と命名した。

(2) 《日本語の上達と周りの嫌がらせ》

クラスター2は、【仕事に慣れて任されるようになった】【他の実習生から嫌われた】【近所の日本人がよく話しかけてくれた】【日本語教室に来る】【日本語の通訳を頼まれるようになった】の5項目である。

「このことがあったから、職場で他の実習生から嫌われるようになって、それがひどくなってきました。日本語できるようになって、通訳を頼まれたり、近所の人と話しかけてくれるようになって、それでもっと嫌われるようになってしまいました。」

クラスター2を、「日本語の上達と周りの嫌がらせ」と命名した。

(3)《家族への罪悪感と寺院での祈り》

クラスター3は、【近くのお寺で心を落ち着けていた】【地元で何かあっても戻れず親不孝と思った】【近くのお寺に行った】の3項目である。

「家族と離れてできないことがたくさんあったんです。日本で悲しいこともあって、家族には心配させたくないから、やっぱりお寺に行ってちょっと祈りをしたり、仏様と話をしたら落ち着きます。お母さんが病気になるって世話ができなくて、お母さんが早く元気になりますようにと祈ることしかできなかった。」

クラスター3を、《家族への罪悪感と寺院での祈り》と命名した。

(4)《職場外の人との関わり》

クラスター4は、【ベトナム料理を日本語教室の先生に食べさせてもらった】【日本の正月に近所の人に招待してもらって参加した】【日本語教室の先生に花見などに連れて行ってもらった】【ベトナム人の友達ができた】【休みの日にベトナム人の友達と買い物に行った】の5項目である。

「友達もできなかったので、日本語教室の存在を知るまでは、寂しかったんです。日本語教室を知ってから、週末ここで一緒に勉強に来たり、先生に話を聞いてもらったり、あっちこちお花見とか花火とか連れて行ってもらったり、それはすごく良かったです。あと、近くの人には正月に招待してもらったりしました。」

クラスター4を、《職場外の人との関わり》と命名した。

4.1.4. クラスター間の類似点と相違点

(1)《家族と離れた寂しさ》と《日本語の上達と周りの嫌がらせ》

「思いを抱くということが共通で、寂しいけど同居の人と仲が良くて話ができないし、ストレスが溜まっていました。プラス辛い感じだったのが共通です。家族と離れたら寂しいけど、話を聞いてくれたら少しでもストレスの解消ができるけど、家族に話したら心配かけるので言えませんでした。」

(2)《家族と離れた寂しさ》と《家族への罪悪感と寺院での祈り》

「これらはとても似ています。寂しいからお寺に行って落ち着きます。」

(3)《家族と離れた寂しさ》と《職場外の人との関わり》

「友達もできて話もよく聞いてくれて、日本の言葉や文化も分かっていって、良くなっていきました。」

(4)《日本語の上達と周りの嫌がらせ》と《家族への罪悪感と寺院での祈り》

「これも関係ありますね。寂しくても、同じ会社の実習生の中では話ができないから、お寺に行くことを選びました。」

(5)《日本語の上達と周りの嫌がらせ》と《職場外の人との関わり》

「これも、会社以外の人との出会いで、私自身良くなりました。同じ会社では話ができないけど、友達や先生は話を聞いてくれてアドバイスをしてくれましたので。」

(6)《家族への罪悪感と寺院での祈り》と《職場外の人との関わり》

「両方が良い存在ですね。存在として私にとって精神的にとっても良かったですね。」

4.1.5. 補足質問

(1)【近所の日本人がよく話しかけてくれた】について

「ベトナムが好きな近所の人が、ベトナムに興味を持ってくれて、話しかけてくれたんです。それも、日本語を勉強した一つの理由です。また、先輩からも紹介してもらいました。ベトナムのことが大好きで、ベトナムに何回も行ったこともあってベトナム料理も好きなので、パーティーとかがあったら先輩が料理を作って持っていってました。毎年正月にその方の子供さんたちが集まった時に、私たちも招待してもらいました。すごく良かったです。」

(2)【日本語教室に来る】について

「日本に来て2年目に日本語教室を知りましたし、ベトナム人の友達が会社外にできてストレス解消ができるようになっていきました。日本語を勉強する理由は、最初日本語が好きから勉強したかったからです。日本人に話をした時に思ったこと、言いたいことをもっと上手に伝えたいのが勉強の理由です。日本語教室に行ったとき今みたいに外国人が多くなかったので、時々私一人と先生3人とかでした。そのときはベトナムについて、生活について困ったことを聞いてくれました。ベトナムに家族を置いて遠い日本国に来て先生たちに出会って、日本語を親切に教えてくれて、日本の文化例えば花見とか、阿波踊りとか、茶道などを初めて参加させてくれました。先生達は実際お父さん、お母さんみたいに優しいです。」

(3)【日本語の通訳を頼まれるようになった】について

「仕事に慣れて、一人前の責任者として働くようになり、3年目で初めて日本語の通訳を頼まれました。信用してくれたんだと思って嬉しかったです。」

(4) 【近くのお寺に行った】について

「寂しい時とか人に話せない話があったらお寺に行って、落ち着いている感じがします。お寺に行くとストレス発散ができました。近くに日本のお寺がありましたので、月に1回くらい自転車で行っていました。行ったのは日本のお寺でしたが、それで大丈夫でした。やっぱりベトナムのお寺の方が良いですけどね。」

(5) 【地元で何かあっても戻れずに親不孝と思った】について

「こっちに来てから、兄や弟の結婚式に参加できませんでした。母が病気になって入院した時にもお世話ができなくて、親不孝でした。」

4.1.6. 総合的解釈

総合的解釈にあたっては、Aの枠組みで解釈する中で、補足が必要な場合は、筆者が本PAC分析前に実施した半構造化インタビューで得た知見によって補いながら考察を行う。

(1) 心の拠り所を必要とする要因

連想項目14項目のうち、(-)項目は3つで、Aにとって日本での技能実習生としての生活は全体としてはプラスの方が強いイメージとなっている。しかし、重要項目別で1位であったのは、(-)項目の【家族と離れた寂しさ】であった点を鑑みるに、家族が一番大切であり遠いところに行っても正月などは家族のもとに帰らなかつたと言っていたが、一時帰国の許されない技能実習期間における、家族と離れて会えない辛さは極めて大きいと考えられる。関連して、(-)項目の【地元で何かあっても戻れずに親不孝と思った】は重要項目別では12位ではあるが、その程度を推察するには「家族が一番大切だ」と言っていたことを踏まえる必要はあるだろう。来日してから兄弟達の結婚式に参加できなかったことや母親が病気になって入院した際に看病できなかったことを挙げて、それに対して自責の念を抱き、自身を親不孝であったと振り返っていた。

その他、【他の実習生から嫌われた】が挙げられ、重要項目順では4位である。日本語が上達すると、職場で他の実習生から嫌われるようになり、ひどくなってきたとのことであるが、このことは半構造化インタビューでも触れていた。努力して日本語力を上げて日本人から仕事を任されるようになると、嫉妬から特に先輩のベトナム人から嫌われて、人間関係が悪かったとのことである。また、そのベトナム人の同僚とは寮で共同生活であるため息抜きができず、喧嘩をしたこ

とを会社に話したら状況が悪化するので職場では誰とも共有することができなかったようだ。

(2) 心の拠り所と考えられること

クラスター2の【仕事に慣れて任されるようになった】は重要項目順で2位と極めて高く、8位の【日本語の通訳を頼まれるようになった】も同様に職場に関連する項目となっている。Aは日本語ができるようになったことで、通訳を頼まれるようになり、職場の人に信用してもらえたと思って嬉しかったと言っていたが、周りから信用を得ている実感は実習期間の多くを費やす職場で安心感を得る上で非常に重要であったと考えられる。

そして、その基盤となっていたのが、日本語教室の存在であろう(【日本語教室に来る】:重要項目順5位)。半構造化インタビューで、日本語教室しか日本語を話す機会はなく、ここで自信を持って日本語を話せるようになったと言っていたが、ここで通訳を任されるほどに日本語の勉強をしたようである。また、技能実習期間が終わってベトナムに戻った時に日本語力が高いと日本語講師になれるため、将来が不安だったので、日本語の勉強をしていたとも語っており、日本語の勉強自体に安心感を求めているとも考えられる。

また、その日本語教室の講師をAは「お父さん、お母さんみたいに優しい」と言っている。家族には心配かけたくないから辛いことを話せなかったが、講師の先生に話を聞いてもらっていたと語っていることから、この日本語教室の講師の存在も、Aにとって心の拠り所の1つになっていたと考えられる。関連項目としては、クラスター4で、【ベトナム料理を日本語教室の先生に食べさせてもらった】(重要項目順10位)、【日本語教室の先生に花見などに連れて行ってもらった】(同14位)と日本語講師に施してもらった思い出が2つ挙げられている。

先の日本語の学習動機について、Aは近所の日本人が話しかけてくれて、言いたいことをもっと上手に伝えたいと思ったことも日本語の勉強をした理由の1つと語っている。この近所の日本人との触れ合いも大切だったようだ。実際、クラスター2の【近所の日本人がよく話しかけてくれた】は重要項目順で6位であり、他にも関連項目として、クラスター4で【日本の正月に近所の人に招待してもらって参加した】(同11位)が挙げられている。

また、ベトナム人の友達や故郷との繋がりについても見過ごせない。来日2年目に日本語教室に来て、ベトナム人の友達が会社外にできてストレス解消ができるようになっていったとAは語っている。実際、ク

ラスター4の【ベトナム人の友達ができた】は重要項目順で3位であり、他にも【休日の日にベトナム人の友達と買い物に行った】(同13位)が挙がっている。半構造化インタビューで、日本語教室の良い所としてベトナムなどのイベントもできて故郷を感じることができる点であると話しており、【ベトナム料理を日本語教室の先生に食べさせてもらった】(同10位)と項目も挙がっている。なお、「ベトナム」という言葉が入った項目は3つあり、全て(+)の項目であった。

(3) 仏教に対する信仰

関連項目としては、【近くのお寺で心を落ち着けていた】(重要項目順7位)と【近くのお寺に行った】(同9位)があり、(+)項目で2つ挙がっているが、寂しい時や人に話せない話があったら寺院へ行き、心を落ち着けてストレスを発散していたとAは語っている。これら2つの項目は、【地元で何かあっても戻れずに親不孝と思った】(同12位)を挟む形で共にクラスター3を形成しているが、Aはクラスター3の解釈の際に、家族には心配をかけられないから、辛い時には仏教寺院に行って仏と対話したり母親の病気が早く治るように祈ったりしたと語っていたように、Aにとって「一番大切な存在」の家族と寺院での祈りが大きく結びついているのではないかと推測される。また、仏教寺院について、半構造化インタビューでは、ベトナムに住んでいた時は定期的にベトナム寺院に通っており、ベトナム寺院に通えないのは寂しいと語る一方で、近くの地域仏教寺院を祈りの代替の場として活用できていることが窺える。

4.2. 調査協力者Bについて

4.2.1. 連想項目の一覧

調査協力者Bは、「日本で働いていた時、どんな時に辛かったり、孤独に感じたりしましたか。また、それを忘れられたり、安心できたことや人、場所等を教えてください。仏教に関することでも良いです。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して下さい」という連想刺激文に対して、15の言葉が連想された。カードへの記載については、Bとの面談がZOOMを用いたオンライン面談であるため、書画カメラを用いて筆者の手元をカメラで写し、Bに見せて確認を取りながら筆者が代筆を行った。それらの言葉の想起順位と重要順位の一覧が表3である。

表3 連想項目一覧

重要順	項目	想起順
1	お世話になった日本語教室の先生や日本人の同僚	13
2	日本語教室の先生に日本語を教えてもらった	6
3	家族のことを考える	10
4	仕事中に日本人の同僚に色々教えてもらった	14
5	日本語の先生が色々な所に連れて行ってくれた	15
6	日本語の先生から食べ物をもたらした	7
7	日本語の先生からお守りをもたらした	8
8	辛い時寝る前に仏様に向かって自分で祈っていた	12
9	日本語の先生が勉強のために色々送ってくれた	9
10	辛いことを同僚のベトナム人にも語らなかった	11
11	逃げることも考えた	5
12	中傷された	4
13	長い間上司からいじめられた	1
14	休憩がなかった	3
15	叱られた	2

4.2.2. 分析の結果図(デントグラム)

調査協力者Bが想起した15の言葉について、それぞれの項目同士の類似度をBに評定してもらって、類似度距離行列を作成した。それを統計ソフトのHALBAUでクラスター分析(ウォード法)した結果図(デントグラム)が図2である。なお、図2の左の数字は重要順位であり、各項目の後ろの()内の符号は単独でのイメージである。まとまりを持つ項目ごとに丸で囲まれたものがクラスターで、クラスターは4つ作成され、上から「クラスター1」~「クラスター4」とする。

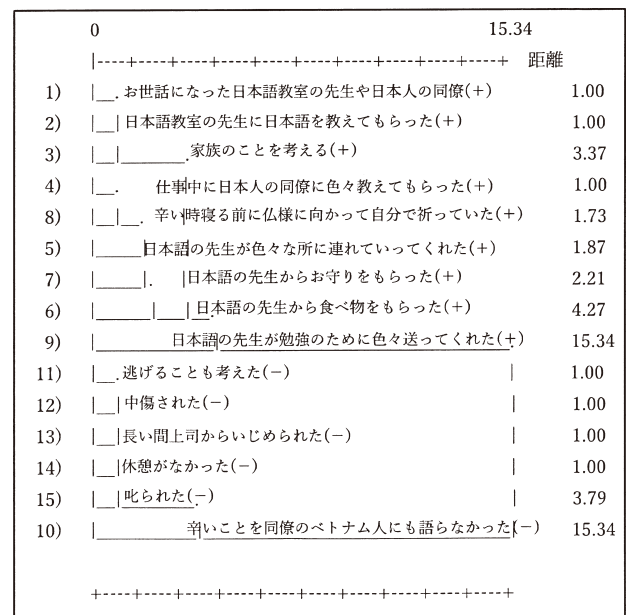


図2 調査対象者Bのデントグラム

4.2.3. クラスターの解釈

調査協力者Bの解釈の要旨を示す。ここでは、原則として、Bの発話をそのまま引用し、「」で表す。連想項目は【】で表し、クラスター名は《》で表す。次いで、

クラスター間の類似点と相違点、および補足質問を示した後、総合的な解釈を行う。

(1) 《最も大切に尊敬に値する家族、お世話になった日本人、仏教》

クラスター1は、【お世話になった日本語教室の先生や日本人の同僚】、【日本語教室の先生に日本語を教えてもらった】、【家族のことを考える】、【仕事中に日本人の同僚に色々教えてもらった】、【辛い時寝る前に仏様に向かって自分で祈っていた】の5項目である。

「大切にしている、そして尊敬しているというイメージです。もっとも大切にしています。家族のことも大切に、日本人の先生や同僚に教えてもらったこと、仏様に祈ること、全て大切なことです。何か、教えてもらったことはベトナムに戻った時に生かされます。日本語が使えたら、ベトナムの日本の会社で働くことができますので、そのために日本語を学びたかったです。」

クラスター1を《最も大切に尊敬に値する家族、お世話になった日本人、仏教》と命名した。

(2) 《日本語講師からの有り難い施し》

クラスター2は、【日本語の先生が色々な所に連れて行ってくれた】、【日本語の先生からお守りをもらった】、【日本語の先生から食べ物もらった】、【日本語の先生が勉強のために色々送ってくれた】の4項目である。

「ありがたいという気持ちです。海外で働いていると、誰かが自分に気をつけてくれたら温かい気持ちになりますよ。先生が送ってくれたお守りが印象に残っています。今でもずっと持っています。お守りの価値もそうですが、わざわざお寺に行って買ってくれたのが嬉しかったです。母の健康に問題があることを言ったら、先生が買って送ってくれました。」

クラスター2を《日本語講師からの有り難い施し》と命名した。

(3) 《職場での辛い体験》

クラスター3は、【逃げることも考えた】、【中傷された】、【長い間上司からいじめられた】、【休憩がない】の4項目である。

「悪いことばかりなので、忘れます。辛いことはこれ以外にはありません。誰にもまだ語ってないですが、今日初めて話しますと、長い間いじめられました。7ヶ月くらい、叱られたり、いじめられたり、休憩ももらえなかったりしました。仕事中、よく上司に中傷されました。逃げることも考えました。でも日本に来る前に借金をしたので、逃げると借金は返せないの、色々我慢しました。いじめについて、これは忘れたけれど、

これを糧に、もっと頑張っていきたいです。この辛さのおかげで、我慢強くなったと思います。辛いことだけど、考え方を変わると良いことも考えられます。」

クラスター3を、《職場での辛い体験》と命名した。

(4) 《誰にも自分の辛さを共有できない環境》

クラスター4は、【辛いことを同僚のベトナム人にも語らなかった】の1項目である。

「圧力を受けて自分のことを周りに語れないし、言ったら周りに迷惑をかけるかもしれないから、黙っていました。これは悪いことだし、知らない方が良いことだから、ベトナム人の同僚にも言えなかったし、心配させるから家族にも言わなかった。ベトナム人の同僚もみんな辛かったし、私のことも知っていたと思います。」

クラスター4を、《誰にも自分の辛さを共有できない環境》と命名した。

4.2.4. クラスター間の類似点と相違点

(1) 《最も大切に尊敬に値する家族、お世話になった日本人、仏教》と《日本語講師からの有り難い施し》

「良いことで、良い印象があるという意味で、心理的に近いです。また、自分にとって大切なことです。」

(2) 《最も大切に尊敬に値する家族、お世話になった日本人、仏教》と《職場での辛い体験》

「全然違いますね。良いことと悪いことなので全然違います。1は自分に良い影響を与えますし、3は自分に悪い影響を与えますね。辛いことはこれだけで、日本に来て最初の方だけです。その後、日本語教室を知りました。」

(3) 《最も大切に尊敬に値する家族、お世話になった日本人、仏教》と《誰にも自分の辛さを共有できない環境》

「全然違いますね、1のグループは最高のことだから。辛かったのは家族にも語らなかったし、誰にも言わなかったです。」

(4) 《日本語講師からの有り難い施し》と《職場での辛い体験》

「関連はないけど、先生から色々もらったら、ちょっと日本の生活の見方が変わりました。辛いことばかりだったけど、日本の生活のイメージが変わりました。日本語の先生たちが優しくなったから。」

(5) 《日本語講師からの有り難い施し》と《誰にも自分の辛さを共有できない環境》

「全然違います。辛いことは誰にも話さなかったし、日本語教室のこともその頃は知りませんでした。日本語教室は日本に来て1年4ヶ月してから知ったので。」

(6)《職場での辛い体験》と《誰にも自分の辛さを共有できない環境》

「関係があります。辛いこと、我慢していたことです。時々、誰かに語られたらいいなあと思っていた。気持ちが楽になるので。皆、同じようにいじめられていたと思うけど、黙っていたのでわかりません。」

4.2.5. 補足質問

(1)【家族のことを考える】について

「家族のことは考えていました。辛いことを忘れられるように家族のことを考えるようにしていました。もちろん辛い時だけではなく、辛ければ辛いほど家族のことを考えたら安心しますし、逆に努力ができます。家族のために頑張ろうと思っていました。家族のために給料を送っていたので。家族のことを考えて、中傷されてもいじめられても頑張れました。」

(2)【辛い時寝る前に仏様に向かって自分で祈っていた】について

「みんなは、ふつう辛いことがあったら、仏様に向かって祈って自分の気持ちを落ち着かせるのですが、それが十分できたかどうかは分かりません。また、辛いことを誰にも言えない時には、仏様に言って心を軽くしていました。本当だったらお寺に行きたかったです。ベトナムで近くにお寺がなくても、家に仏壇があります。お寺に行ったり、家庭で仏様や祖先に手を合わせていました。仏様の名前や祖先の名前を読んで、願いことを言って、祈っていました。日本では、辛い時は寝る前に目をつぶって、小さい声に出してつぶやいて、心の中で仏様に向かって自分で祈っていました。日本でも、ベトナムのお寺があったら行きたかった。日本のお寺も良いけど、中の雰囲気も違うし、日本のお寺の習慣も祈り方もわからないから、行けませんでした。」

(3)【逃げることも考えた】について

「仕事を辞めたら借金は残ります。借金が残ると困る人は勿論家族でしょう。ベトナムに戻るまでには借金はなくなりましたが、借金はとても多いです。前の先輩も殴ったり、蹴ったりされたことがあったから、気をつけるようにと言われていた。最初はとてもひどかったのですが、なぜかわからないですが、7ヶ月くらい経って、私が生活に慣れて、仕事にも慣れてくると、上司の態度が変わって、色々食べに連れて行ってくれたり、花見などにも連れて行ってくれるようになりました。辛かったですが、仕事に慣れて7ヶ月くらい経ったら、大丈夫になりました。」

4.2.6. 総合的解釈

総合的解釈にあたっては、Bの枠組みで解釈する中で、補足が必要な場合は、筆者が本PAC分析前に実施した半構造化インタビューで得た知見によって補いながら考察を行う。

(1)心の拠り所を必要とする要因

連想項目15項目のうち、(-)項目は6つで、Bにとって日本での技能実習生としての生活は全体としてはプラスの方がやや強いイメージとなっている。

6つの(-)項目のうちの5つで1つのクラスター《職場での辛い体験》(クラスター3)を構成している。それらの重要項目順については、【逃げることも考えた】が11位、【中傷された】が12位、【長い間上司からいじめられた】が13位、【休憩がなかった】が14位、【叱られた】が15位と、他の項目と比べるといずれも下位ではあるものの、いずれも職場に関する具体的な項目が5つ並ぶ。生活や仕事にも慣れてくると上司の態度が変わったとのことであるが、しばらくの間精神的なストレスになっていたと思われる。また、クラスター4の【辛いことを同僚のベトナム人にも語らなかった】は重要項目順で10位であるが、(+)項目の【家族のことを考える】(同3位)の上位項目と結び付く。職場でのいじめ等で精神的に辛い日々を過ごしていて逃げたい思いもあったが、日本に来る前に借金をしたため、逃げると借金は返せず家族に迷惑をかけてしまうので、誰も共有せずに我慢していたことということである。Bは、日本での生活で辛かったことやストレスに感じたことは、これ以外には特に見当たらないとも言っていた。

(2)心の拠り所と考えられること

仕事中、《職場での辛い体験》で苦しんでいたようだが、7ヶ月経ち仕事に慣れてきた頃から上司の態度も変わり、辛さもなくなってきたとのことであるが、クラスター1の項目を見ると、【お世話になった日本語教室の先生や日本人の同僚】が重要項目順1位であり、同4位に【仕事中に日本人の同僚に色々教えてもらった】が挙げられるなど、職場において日本人の同僚の存在はBの大きな心の支えになっていたと思われる。

来日して大きな転機となったのは、1年4ヶ月経って知った日本語教室の存在であるようだ。日本語教室の優しく接してくれる日本語講師に出会ってから、Bは日本の生活のイメージが変わったと語っている。クラスター2の《日本語講師からのありがたい施し》は、【日本語の先生が色々な所に連れて行ってくれた】(重要項目順5位)、【日本語の先生からお守りもらった】(同7位)、【日本語の先生から食べ物もらった】(同6位)、

【日本語の先生が勉強のために色々送ってくれた】(同9位)と4つの項目で構成されているが、すべての項目が日本語講師からの具体的な施しについてである。Bがクラスター2の解釈で語っているように、海外で働きストレスを抱える中で、自分に気遣ってくれる日本語教室の講師との触れ合いを通して、Bは安らぎを感じていたと推測される。クラスター1の【お世話になった日本語教室の先生や日本人の同僚】が重要項目順1位というのを鑑みても、日本語講師の存在は、Bにとって大きな支えであったと考えられる。同2位の項目は【日本語教室の先生に日本語を教えてもらった】であるが、Bが半構造化インタビューで、日本語学習が日本語教室で一番楽しい活動であると語っており、またクラスターの解釈で、将来ベトナムへ帰国後の就職のために日本語の勉強を続けていたと語っていることを踏まえると、辛さを忘れ将来を見据えて前向きな気持ちで取り組める日本語学習は、Bにとっての心の支えになっていたと言えるだろう。

さらに、家族の存在も欠かせない。Bは(-)項目のクラスター3について語る際に、職場が辛く逃げ出したかったが、借金が残り家族に迷惑をかけたくないから我慢したと述べており、同じく(-)項目のクラスター4でも誰にも語れなかった辛さについて触れた時にも、心配させたくないから家族にも黙っていたと述べているなど、ここでも家族について触れており、Bにとっての家族の存在の大きさが窺える。そのため、半構造化インタビューでは、特に母親に心配をかけたくないで一切黙っていたと語っていたが、辛さを共有できないストレスも甚大だと推測される。この大きな存在である【家族のことを考える】の項目については、重要項目順で3位と高順位であり、最も大切に尊敬に値すると評されているクラスター1に属していることを踏まえると、この時間が重要性だと考えられる。【家族のことを考える】について補足質問をした際には、辛いことを忘れられるように家族のことを考えていて、辛ければ辛いほど家族のことを考えたら安心するし、家族のために給料を送っていたので、辛くても家族のことを考えて頑張っていたと語っている。このように、Bにとって家族について考えるのは、安らぎの時間でもあり、自らを奮い立たせる存在であったと言える。

(3) 仏教に対する信仰

仏教に関する項目としては、(+)項目の【辛い時寝る前に仏様に向かって自分で祈っていた】が1つ挙がっている。重要項目順では8位と中位であるが、クラスターとしては、最も大切に尊敬に値すると評され

ているクラスター1に属している。Bは、この項目の補足質問では、仏教の祈りについて、辛いことを誰にも言えない時に仏と対話して自身の心の負担を減らすようにしていたと語っていた。寺院へ参拝に行ったり仏壇に向かって手を合わせたりしていたベトナムでの信仰活動と比べて日本での信仰の環境が不十分であることや、代替の場としての日本の地域仏教寺院への興味を抱いているを示唆する発言もあった。しかし、辛さを家族や同僚など誰とも共有できない異国の生活において、心の中で祈るなど自分なりの信仰生活を整えながら仏教の信仰を継続していたことは、Bの精神面の安定において重要な時間であると推測できる。

5. 考察および今後の課題

5.1. 考察

以上のように、仏教徒のベトナム人技能実習生の心の拠り所を捉えることを目的として、その心の拠り所を必要とする要因及び仏教の信仰面もあわせて、調査協力者2名それぞれの態度構造についてPAC分析を試みた。これで一般化はできないが、個人独自の内面を全体的に捉えることについてはある程度できたと考える。

仏教徒ベトナム人技能実習生の心の拠り所、またその心の拠り所を必要とする要因、そして仏教の信仰について、それらはどのようなものであるか、以下考察していく。」

(1) 心の拠り所を必要とする要因

AとBの2人の日本での技能実習生としての生活としては、連想項目数から、全体としてはプラスの方が強い傾向にあった。

職場の環境については、AもBも共に連想項目として挙げている。これは先行研究でも明らかになっているが、職場でのいじめ等で精神的に辛い日々を過ごしているため失踪する実習生がいたという内容で、Bに極めて近い。それに対して、Aは他のベトナム人技能実習生から嫌われたことを挙げている。日本語が上達して日本人から仕事を任されるようになると、嫉妬から特に先輩のベトナム人から嫌われて人間関係が悪くなり、寮で共同生活であるため息抜きができなかったとのことである。

次いで、家族に関する項目を挙げることができる。Aは家族と離れた寂しさが連想項目の重要項目順で1位であり、家族の一大事に帰国できない状況を親不孝に感じたとも語っていたが、その思いは極めて大きいと推察される。Bは職場の辛さを誰とも共有できないという文脈で、家族について触れている。逃げたい思いもあったも、日本に来る前に借金をしたため、逃げ

ると借金は返せず家族に迷惑をかけてしまうので我慢していたと語っていた。

(2) 心の拠り所と考えられること

Aは日本語が上達してベトナム人の同僚から嫉妬は受けたが、通訳を頼まれるようになり、職場の人に信用してもらえたと思って嬉しかったと語っていた。関連する連想項目の重要順が2位であるが、周りから信用を得ている実感は、実習期間の多くを費やす職場で安心感を得る上で重要であったのだろう。Bは、日本人の同僚の存在が連想項目の重要順で1位（日本語教室の講師と共に1位）であり、職場において日本人の同僚の存在はBの大きな心の支えになっていたと思われる。

日本語の学習については、AもBも共通して、連想項目に複数回「日本語」という言葉が使われている。技能実習期間が終わってベトナムに戻った時に日本語力が高いと日本語講師になれるため、将来が不安だったので、日本語の勉強をしていたとも語っており、辛さを忘れ将来を見据えて前向きな気持ちで取り組める日本語学習自体に安らぎを求めていたと推察できる。

またBは、日本語教室の優しく接してくれる日本語講師に出会ってから日本の生活のイメージが変わったと語っている。日本語講師の存在は連想項目の重要順で1位であることも踏まえると、この存在は間違いなく大きな心の支えになっていただろう。Aについても、連想項目に関連する項目が複数挙がっているが、「お父さん、お母さんみたいに優しい」と評し、家族には心配かけたくない話せないことを日本語講師に話を聞いてもらっていたと語っていることから、心の拠り所の1つになっていたと考えられる。

その他、Aにとっては、話しかけてくれた近所の日本人との触れ合いも大切だったと考えられる。ベトナム人の友達（連想項目の重要順3位）については、この友達が会社外にできたことでストレス解消ができるようになっていったと語っていた。「ベトナム」という言葉が連想項目に複数上がっていることから、故郷との繋がりは異国における心の支えとして重要なだろうと推察される。

Bについては、家族のことを考える時間（連想項目の重要項目順3位）が心の支えとしての重要度が高いと考えられる。辛いことを忘れられるように家族のことを考え、辛ければ辛いほど家族のことを考えたら安心すると語っていた。また、家族のために給料を送っていたので、辛くても家族のことを考えて頑張っていたと語っているように、Bにとって家族は自らを奮い立たせる存在でもあると言える。

(3) 仏教に対する信仰

Aは、仏教に関連することとして、2つ(+)項目が挙がっている。寂しい時や人に話せない話があったら寺院へ行き、心を落ち着けてストレスを発散していたと語っている。これら2つの項目は家族に関連する項目と共に1つのクラスターを構成しているが、家族には心配をかけられないから、辛い時には仏教寺院に行って仏と対話したり母親の病気が早く治るように祈ったりしたと語っていたように、Aにとって「一番大切な存在」の家族と寺院での祈りが大きく結びついているのではないかと推測される。

Bは、1つの(+)項目が挙がり、重要項目順では中位であるが、最も大切に尊敬に値すると評されているクラスターに属している。辛いことを誰にも言えない時に仏と対話して自身の心の負担を減らすようにしていたと語っている点はAと共通している。

Aはベトナム寺院に通えないのは寂しいと語る一方で、近くの地域仏教寺院を祈りの代替の場として活用できていることが窺える。それに対してBは、ベトナムでの信仰活動と比べて、日本での信仰の環境が不十分であることや、代替としての日本の地域仏教寺院への興味を示唆する発言もあった。

異国の生活で自身の辛さを誰かと共有しづらい環境の中で、AもBも、心の中で祈るなど自分なりの信仰生活を整えようとしているように窺える。このベトナム人技能実習生の仏教の信仰の面の分析については、これまでの先行研究で明らかになっていない点であるが、本稿の分析を通して、仏教の信仰は精神面の安定において重要な要素となっているのではないかと考えられる。

5.2. 今後の課題

仏教徒ベトナム人技能実習生の心の拠り所について、調査協力者2名の独自の内面をPAC分析により全体的に捉えることはできたと思われるが、一般化には至っていない。その観点での調査・分析を今後の課題と考えている。

また、仏教徒ベトナム人技能実習生は信仰活動が十分にできていないということであるが、今後の多文化共生を進めていく上で、仏教の信仰の面でベトナム寺院や地域仏教寺院にはどのような役割があるかも検討していく必要がある。

謝辞

本調査に協力して下さった徳島県吉野川市国際交流協会会長、受講生のベトナム人技能実習生および元技能実習生の皆さん、助言を下さった九州大学大学院博士課程の指導教官およびゼミの皆さんに心より感謝いたします。

注

- 1 多文化共生を本稿では、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」(総務省(2006)と定義する。
- 2 本稿では、「心の拠り所」を「辛さや孤独から解放されて安心を与えるもの、心の支えとなるもの、頼みとするところ」と定義する。
- 3 日本で急速な国際化の進展や出入国管理及び難民認定法の改正による在留資格の整備・拡張により、1980年代後半以降、日本各地域に定住する外国人が増加した。それに伴って、地域住民のボランティアによる日本語学習支援、いわゆる地域日本語教育の活動が活発に行われるようになった。この地域日本語教育が行われているのが地域日本語教室である。ここでは大学や日本語学校のような教育機関とは違い、隣人という立場である地域住民の日本人と外国人が継続的かつ日常に接触し交流する場になっている。(伊東 2011)。
- 4 本稿では、ベトナム寺院を、「日本に存在するベトナム式の仏教寺院」と定義して、日本の地域仏教寺院とは区別する。なお、日本の地域仏教寺院は、本稿では「日本の各地域に存在する伝統仏教寺院」と定義する。現在日本に存在するベトナム寺院としては、神奈川県愛甲郡愛川町のチュア・ベトナム、埼玉県越谷市の南和寺、兵庫県神戸市の和楽寺、兵庫県姫路市の大南寺がある(三木 2017)。
- 5 インドシナ全域に大きな犠牲者を出したベトナム戦争により、ベトナム難民が発生した。日本では、ボートピープルという言葉がベトナム難民という言葉とほぼ同義で用いられているが、実際ベトナムとの隣接国には陸路を通じて避難したケースや、空路を通じて諸外国に避難して保護を求めたケースもある。諸外国と比べて、日本では都市部の施設を通じて援助が行われていたため、現在でもベトナム難民は都市部に集住して暮らしている(萩野 2013)。
- 6 1992年に吉野川市国際交流 (<https://yia2020.net>) の前身である鴨島町国際交流協会が設立され、鴨島町国際交流協会の「日本語教室」が同年10月に開校した。その後、2004年に、鴨島町を含む4カ町村合併により吉野川市が誕生したが、それに合わせて日本語教室も吉野川市国際交流協会へと移行された。(吉野川市国際交流協会 2005 ; 村上 2015)。
- 7 日本語教室は毎週日曜日に開催されていて、午前中に山川教室、午後に鴨島教室でそれぞれ約2時間実施されている。2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大により受講生が少し減っているが、2019年度は、合計47回実施して78人の外国人(ベトナム人48名、中国人13名、ミャンマー人9名、インドネシア人3名、アメリカ人2名、フィリピン人1名、モンゴル人1名、タイ人1名)が受講し、毎回15名程度が参加していた。
- 8 半構造化インタビューとは、質問の文言を事前に決められているものの、被験者の回答に応じて質問を柔軟に変更しながら行うインタビューのことである。質問の文言、順序等が事前に決められている構造化インタビューや、語り手に自由に語ってもらう非構造化インタビューとは区別される(太田 2019)。
- 9 HALBAU とは、High quality Analysis Libraries for Business and Academic Usersの略称で、一般に「はるぼう」と呼ばれている。多変量解析のサブプログラムをその基本ルーチンとして作成され、そこにデータ入力・編集、基礎的な統計学の手法のプログラムの加えられた解析ソフトであり、本調査で使用しているHALBAU 7は、現時点での最新バージョンである(高木 2007)。なお、本稿ではこのHALBAU 7をHALBAUと表記している。
- 10 無料のオンラインビデオ会議システムのZOOM (<https://zoom.us/jp-jp/meetings.html>) は、多くの大学等の教育機関で導入され、双方向型のオンライン授業や面談等で活用されている(加納 2020)。画面共有の機能を用いることで、画面上で参加者同士が資料等(書画カメラも可)を共有することができる。

参考文献

- 伊東祐郎 (2011)「(特集) 地域における日本語教育の展望—日本語教育の総合的推進を目指して」文化庁月報. 8月号. No. 515.
https://www.bunka.go.jp/pr/publish/bunkachou_geppou/2011_08/special/special_02.html
(2021年3月26日最終閲覧)
- 太田裕子 (2019)『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ—研究計画から論文作成まで—』東京図書
- 荻野剛史 (2013)『「ベトナム難民」の「定住化」プロセス—「ベトナム難民」と「重要な他者」とのかかわりに焦点化して』明石書店
- 加納寛子 (2020)「コロナ禍における高等教育でのオンライン授業の可能性について～学生のオンライン授業のための通信環境と ICT 機器の所有状況に関する調査より～」日本科学教育学会年会論文集. 521-524.
- 川上郁雄 (2001)『越境する家族』明石書店
- 上林千恵子 (2015)『外国人労働者受け入れと日本社会技能実習制度の展開とジレンマ』東京大学出版会
- グエン・ティ・ホアン・サー (2013)「日本の外国人研修制度・技能実習制度とベトナム人研修生」佛教大学大学院紀要. 41:19-34.
- 厚生労働省 (2020)『「外国人雇用状況」の届け出状況まとめ』
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09109.html
(2021年3月26日最終閲覧)
- 駒井洋 (2006)『グローバル化時代の日本型多文化共生社会』明石書店
- 佐藤悦子・李仁子・佐藤寛貴 (2018)「東北地方における地域日本語教室に関する文化人類学的考察—日本人支援者の視点をもとに—」東北大学大学院教育学研究科研究年報. Vol.66 2:1-16
- 宋弘揚 (2017)「中国人技能実習生とホスト社会との接点—石川県白山市と加賀市を事例に—」地理科学. Vol.72 1:72-1
- 総務省 (2006)「多文化共生の推進に関する研究会報告書」https://www.soumu.go.jp/main_content/000539195.pdf (2021年3月26日最終閲覧)
- 高木廣文 (2007)『HAUBAU7によるデータ解析』シミック株式会社
- 徳島労働局 (2020)「徳島県における『外国人雇用状況』の届出状況のまとめ」
https://jsite.mhlw.go.jp/tokushima-roudoukyoku/newpage_00318.html (2021年3月26日最終閲覧)
- 内藤哲雄 (2017)『PAC分析実施法入門 [改訂版]—個を科学する新技法への招待—』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一編 (2008)『PAC分析研究・実践集1』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一編 (2011)『PAC分析研究・実践集2』ナカニシヤ出版
- 中川かず子・神谷順子 (2018)「北海道におけるベトナム人技能実習生の日本語学習意識と学習環境：多文化共生の視点から考察」開発論集. 102:79-98
- 永吉希久子 (2020)『移民と日本社会』中公新書
- 野上恵美 (2010)「在日ベトナム人宗教施設が持つ社会的意味に関する—考察：カトリック教会と仏教における活動比較」鶴山論叢. 10:41-56
- 法務省 (2020)「外国人材の受け入れ・共生のための総合的対応策 (令和2年度改定) の概要」
- 三木英 (2017)『異教のニューカマーたち—日本における移民と宗教』森話社
- 宮島喬・鈴木江理子 (2019)『新版 外国人労働者受け入れを問う』岩波ブックレット No.1010. 岩波書店
- 村上瑛一 (2015)「吉野川市国際交流協会日本語教室の歩み」吉野川市国際交流協会
- 毛受敏浩 (2020)『移民が導く日本の未来—ポストコロナと人口激減時代の処方箋』明石書店
- 山辺真理子 (2011)「『居場所』としての日本語教室」シリーズ多言語・多文化協働実践研究. 13:66-73
- 吉野川市国際交流協会 (2005)「国際交流 よしのがわ」第1号. https://yia2020.net/wp/wp-content/uploads/2019/11/BRW802BF949D49D_000058.pdf
(2021年3月26日最終閲覧)

清藤 隆春

Peace of Mind for Buddhist Vietnamese Technical Intern Trainees:
Based on PAC (Personal Attitude Construct) Analysis in the Local Japanese Language School

KIYOFUJI Ryushun

Abstract

Recently, the number of foreign people in Japan have grown rapidly. The increase in the number of Vietnamese Technical Intern Trainees especially, has been remarkable. Since the working conditions in Japan could be of poor quality, they cannot work and learn Japanese language with ease, for their future career. And as of religion, most Vietnamese follow Vietnamese Buddhism; it could be difficult for them to continue with their religious beliefs in Japan. From the aspect of multicultural coexistence, it is an urgent need to clarify how Vietnamese Technical Intern Trainees could have a peaceful existence, including following their religious belief. This paper aims to discuss this matter through the qualitative survey method, PAC, based on the interviews conducted among Vietnamese Technical Intern Trainees in the local Japanese language school. It concludes that Vietnamese Technical Intern Trainees can find peace in several places, such as the Japanese language school with the Japanese teachers, the time to study Japanese language for their future career, and the satisfactory relationship with Japanese coworkers. Regarding religious belief, they would try to continue their own religious life with actions such as praying in their mind, and the Buddhist beliefs seems to be an important factor that keeps them mentally stable in Japan.

Keywords: Multicultural Coexistence, Buddhist Vietnamese Technical Intern Trainees, Peace of Mind,
Local Japanese Language School, PAC Analysis